

第4回 仙台市総合計画審議会起草委員会議事概要

この議事概要は、事務局の責任においてとりまとめた速報であり、事後に修正する可能性があります。なお、正式な議事録については、別途ホームページに掲載しますので、そちらをご覧ください。

日 時 平成22年3月10日(水) 18:30～20:30
会 場 仙台市役所2階 第四委員会室
出席委員 大滝精一委員長、江成敬次郎委員、小野田泰明委員、小松洋吉委員、
西大立目祥子委員、庭野賀津子委員、間庭洋委員、柳井雅也委員 [8名]
欠席委員 [0名]
オブザーバー 大村虔一総合計画審議会会長
仙 台 市 企画市民局次長、総合政策部長、総合計画課長
次 第 1 開会
2 議事
(1) 新基本構想の策定方針について
(2) その他
3 閉会
配付資料 資料1 新基本構想策定方針(案)
資料2 新基本構想の都市像(たたき台)

会議の概要

開会

議事

(1) 新基本構想の策定方針について

- ・大滝委員長から資料1及び資料2を基に説明し、その後、意見交換を行った。

<主な意見等>

(資料1について)

- ・策定の趣旨の記述に、安心して生活できるということについて何か記載が入っていてもよいのではないか。
- ・都市像の記述で、「行動する市民力」は市民の目線から非常にわかりやすい言葉だろうと思う。この点で、どういうふうに市民のエネルギー化を図っていくかというところが大事なのではないかと。基本構想の推進のところで、「行動する市民力」を生かす、あるいはエネルギー化するシステムということについて入っているとよいのではないか。
- ・子供たちのことに対する表現の投げかけが、すべて「未来」とか「将来」という形になっているが、現在の青少年もしっかりとらえて表現したほうがよい。子供たちは未来の担い手だけではなくて今も担い手の一員だと思うので、必ずしも未来という冠で時間を制約する必要はないと思う。
- ・今の子供たちの教育の充実とか、確かな学力をはぐくむというようなことをもっと入れ

てよいのではないか。学都仙台というと、どうしても高等教育が中心に据えられているようなイメージがあるが、確かな学力をはぐくむためには、もっと初等教育から力を入れていかなくてはいけない。生きる力の元は学力だと思うので、そういったところをはぐくむ人づくりを、もっと視点として打ち出してもいいのではないか。

- ・ 子供がコミュニティの一員か否かは、とても大切な要素だと思う。教育で、今、大きな問題になっていると思うのは、コミュニティの一員としてコミュニティに参加していないというか、知識としていろいろなことは学んでいるけれども、体験を持って地域の人達と何かいろいろなことを行っているということが足りないということ。「行動する市民力」を育てるという意味では、できるだけ小さいときから社会の一員として学んでいくような話が入るとよいのではないか。
- ・ 策定の趣旨のところに、子供のことについて何か表現があってもよいかもしれない。
- ・ 今の時点はターニングポイント。活性化していく経済の中でいろいろなことが自由にできたというよさがあったのが20世紀だが、人が少なくなるとそのところは違ってくる。そうすると「行動する市民力」というのは格好良いことでもあるが、そういう力を借りないと本当に生き生きした暮らしがつかれないという差し迫った話も、本当は片一方にあるはずで、そういう時期に、元気な市民をどうしてつくっていくのかという話という気がする。
- ・ 策定の趣旨のところで課題がたくさん示され、都市像の2段落目で、「行動する市民力」によってそれを解決していきますという力強い宣言になっていると思うが、「行動する市民力」が魔法のつえのように聞こえてしまうのも難しい。むしろ、給料も減り、自由になる時間もなく、きゅうきゅうとしている現状の中で、どうやって余裕を持った行動をする市民になれるのかと、市民とすればなかなか大変な宿題を背負っていると受けとられるかもしれない。厳しい現状は、教育と雇用、福祉あたりに出てくるが、皆サポートするに当たって、やる気が出ない、技術がない、チャンスがないとかがあると思う。やる気、希望を持てないというのは、ビジョンがきちんとしていないということもあるし、時間もないということもある。具体的なスキルについてはかなりサポートできると思う。チャンスがないというのは経済による話である。具体的なスキルをサポートする、共に学べる社会をつくる、コミュニティを大事にしてそこで大事にされた経験によってやる気とか希望をサポートする、ということなのかもしれないが、何か「行動する市民力」をかん養するための仕組みについて少し踏み出した記述がないと、その先がないのではないかと思う。
- ・ 教育とコミュニティに関する分野などを横串でつなぎ、資源を互いに共有しながらそれを支援していくようなことが見えないと、絵に描いたもちになると思う。「行動する市民力」が大事です、だから「行動する市民力」をかん養するために本市はこういうふうに市民を応援します、したがって企業も痛みを分かち合ってほしいし、市民の皆さんも共感していただきたい、一方、市は何を打ち出すのかみたいなのがもう少し見える書きぶりだと、よりすばらしいのではないか。
- ・ 21世紀は差別化からやがて個性化、あるいは個別化のほうに入っていく、自分たちの光をどう放つのかということに論点が移ってきていると思う。そのとき重要になってく

るのは、都市経営における効率化をどう達成するか。効率化は単にコストカットではなく、一つの効果が非常に大きなシナジー効果を生み出していくような、そういった意味での効率化を図っていくということ。つまり、人口も減り、人材も限られてくると、一人一人が市民力とか民度というものをきちんとつけていかなければならない。これは緊急の課題で、そういった中で効率性をどう追求していくのかということで、差別化から個性化、そしてそれに伴う効率化というものが非常に重要になってきていて、その後に新機軸として仙台の都市経営は何なのかということをも更に付加していかななくては行けない。今、我々が議論すべきことというのは、地域経営会議であるとか、あるいは例えば公共投資の整備の仕方であるとか、そのあたりの合意形成をしておき、ダイレクトな表現をすると基本構想としてはなじまないというのであれば、その仕組みを考えていくとか、そういうニュアンスをにじませておき、そして仙台らしさというものを最終的には求めていくということを書いていけばよいのではないか。

- ・行政の効率化について、90年代に非常に大きな後押しする概念になったのはNPM（ニューパブリックマネジメント）。市民を顧客として位置づけ、行政単位内の効率化を非常に図り、行政がやる必要がないものについてはアウトソーシングして、TMOのような担い手の中間集団を膨らませていく。しかし、TMOはうまくいっているものもあるが、実際にはなかなかうまくマネジメントできない。実際ビジネスにならない。また、どうしても従来の行政の枠組みの上にそれを立ち上げてしまうから、従来の都市計画、都市整備の方針とのギャップがあるし、また、こちら側には従来の商店会の枠組みがあって、その間中でなかなかうまく位置づけができないということで、今の仕組みを生かしたままNPMを上に乗っけるような形をとって予算だけ減らしてしまったために、イギリスでドラスティックにやっているようなNPMのマネジメントが日本では働かなかった。効率よくやらなくては行けないことは確かだが、もう少し違う枠組みでやるべきと思っている。
- ・例えば、市の大事な建物の改修や建築に、市民に参画してもらうなど、市が今まで決めて発注していた部分のある部分については、その意思決定に市民が参画する。参画することによって市民が大事にされている、自分の意思決定が市に非常に影響を与える、人として尊重されているということが参画した市民に還元されるので、一番難しいやる気・希望の部分は高まる。東京とか大都市では無理だが、仙台ぐらいのコンパクトなところであれば、直接参加型のそういう仕組みができると思う。そういうことで、できたもののクオリティーも多分上がるし、その運営も、意思決定に参画したから参画した市民も責任を共有して、市もマネジメントについては楽になる、そういう善循環をできるような仕組みを具体的にはとっていくべきで、そのときの後押しになる憲法にこの基本構想がなっていけばよいと思う。お金と時間に余裕がないときは従来型でよいが、できるだけ余裕がある限りは新しいやり方を探りなさいという、もう少し背中を押してあげたい。現場はかなり疲弊していて、特にやる気のある人が疲弊しているのは非常に危険だと思っている。やはり、やる気のある人が尊敬されて、また次の仕事につながるといのが、仙台の活力をうまく回していく基本ではないかと思っているので、やる気のある人を孤立させないような基本構想であつたらよい。

- ・市民力と出ているのは、具体的にどうなのか、どこで担保をとっているのかという質問が出かねない。だから、その仕組みや参画の仕方をもう少し議論しておいたほうがよいのではないか。
- ・要するに、市民参画、市における政策形成過程、意思決定プロセスの中に市民が入ってくる余地を広げていく、参画できる場のつくり方、プラットフォームの設計の仕方や場とか、プラットフォームといっても抽象的なので、それを具体的にどうやっていったらよいかというような話とか、確かに議論は行わなくてはいけないが、基本構想にどこまでそれを記載することができるかということがある。具体的な話や総合計画になったとき、10年で何するのかという話が当然出てくるので、かなり具体的なイメージを与えないとだめだと思う。その意味で、そこは非常に重要な論点だと思う。
- ・連携みたいなことは物すごい大きいキーワードになるのではないかと考えている。今まで、公共側が道路なら道路を造って、後で民間でうまく建物を造ってやりなさいと言えば、皆競争してある程度よいものができるという状況になってきたが、だんだんそうではなくなりかけている。ではどうやってよいまちにするのかというのは、だれが、どういうふうに、そのところにかかわっていけばよいのかというようなことを調整しなければならなくなり、役所の中でも、相当密にいろいろなことをやらなくてはならなくなっている状況が起きてきている気がする。
- ・仙台市と周辺の連携というあたりが多分相当大きくて、宮城、山形、福島ぐらいをとると、この30年ぐらいの間に仙台市の人口はその中のシェアで多分2割5分は軽くいく。それだけほかの人口の減りが激しいというふうに多分動くだろうと一般的には言われている。そういうときに、仙台は何するのか。今までは仙台の中でハッピーになる計画をつくって、いろいろなところと連携しますよとか、海外から来た人ともうまく交流しますよとか言っていればよかったが、本当にそういうことだけでよいのか。やはり、仙台がいてくれてよかったねと、皆で支えてくれて、仙台もまた皆を支えるみたいな、そういう話というのは、大変難しいテーマかと思っている。
- ・仙山交流をいろいろやっているが、あれは行政が始めたというよりは民間の中から動きが出てきて、だからそういう意味では「行動する市民力」というようなものは行政区域を越えてもう動き出しているという一つの例かもしれないし、その連携みたいなものにどういう位置づけをするのかというあたりは、今回のテーマでは大きいと思う。
- ・この都市像の書かれている下から4行目の創造的な都市づくりの中に、多分そういう趣旨、気持ちは含まれてはいるのだろうと思う。まずは行動、そしてその力を強めていくための連携、システム、スクラム化みたいなものはこの中に感ずることはできると思う。
- ・連携についてはどのぐらいまで書くのかというのも大きいと思う。仙台がこれから東北に対してやらなくてはいけないことはすごくたくさんあると思うし、やはり「行動する市民力」だけでこの課題は解決できないと思うので、市民と市役所の関係もあるし、市民活動をしていて町内会とNPOがどういうふうに結ばれていくか、そののかかわりもまだ全然できていない。だから、連携というキーワードは挙げておく必要はあると思うが、どこまで踏み込んでそのプラットフォーム的なところを描くかは大事と思う。
- ・市民と市役所の関係、町内会やNPOの関係などまで基本構想では入り込まなくてもよ

- く、漠然と表現して、取っ掛りだけ入れておけばよいと思う。
- ・宮城県と東北5県でもそうだが、仙台が東北の兄貴分だとか、けん引するとか、リーダーシティとかというスローガンはあるが、では具体的に何をしたらよいか、役割としてどうかという部分で、実質的に、けん引、リードするということもあわせて言うならば、やはり、東北の全体のことを考えて仙台がいろんなことを行動していくとか、間柄がきちんとして形成されていないといけない。市民や経済界のほうはむしろ東北とは仲が良いという事例はたくさんあるので、むしろ、行政がそこを一緒になって実施したほうが東北とは仲良くなれるし、そういう間柄をしっかりと継続的に形成し続けていくことによって信頼関係が深まれば、名実ともに仙台へのいろいろな頼りだとか、あるいは一緒にやろうという機運が高まっていくと思う。間柄がなければ、「行動する市民力」の中でも力を借りて一緒にやっていくことによって、別添図に描いてあるようなことに向かっていけるのではないかなと思う。
 - ・連携はやはりキーワードだと思う。「行動する市民力」をサポートするために、市は自らのシステムをフレキシブルとか相対化してきちんと支える、相互に連携するという横串の連携をきちんとうたってほしいと思う。
 - ・地域間の連携はなかなか難しいが、できるとすれば仕組みをきちんとして連携するのではなく、何かプロジェクトベースで連携し、その経験をフィードバックして仕組みをブラッシュアップするような順番ではないかなと思っている。
 - ・市民力を支えるために縦割りをやわらかく横に連携させる、地域を越えた連携についてはプロジェクト先行で仕組みにフィードバックをする、この2つのやり方をもって連携を実現しますとか、とても記載できないと思うが、それぐらいの熱意がないとこの厳しい21世紀は渡っていけない、克服できないのではないかなと思う。
 - ・都市機能からの連携は三つぐらいの分類が可能。一つは、仙台という都市の大きさが持つ拠点性、勢力圏としての仙台の連携。一つは、分都論みたいな形でお互いが補完するような関係。一つは、転都論という考え方があって、持っている機能をばらまいて、それをネットワーク等の力を借りて連携させていくというような形。連携というとき、人の話が専らされてきているが、いわゆる都市地域の連携とか、地域論におけるような地域間の連携というものをもう少し議論しておく必要があると思う。
 - ・東北のいろいろな地域の資源を互いにネットワーク化することによって、強みを生かし合うということが、仙台が連携に果たすべき大きな役割の一つではないかなと思う。「成長するアジア諸国のパワーを東北の成長につなげる」というのは、更にそういったものに付加して考えていくテーマであると思う。
 - ・現実には、かつての10年に比べて仙台の持っている意味とか役割とかというのは、事実上非常に大きなものになってくるし、圧倒的な吸引力を持って存在すること自体は否定しようがない。多くの人たちは実は暗黙のうちにそのことを了解しているが、実際にはこういう計画の中にはなかなかそれが表になって出てこない。ただ、現実と建前の部分が余り乖離していくというのは、本当はよくないのではないかなという感じもある。
 - ・北海道では札幌圏に圧倒的に集中し、膨張していて、札幌圏以外の北海道はどんどん吸い取られている。そういう下で北海道の札幌以外の地域はどういう地域形成をしたらよ

いのかとか、そこで暮らし続けていく雇用その他どうしたらよいのかという命題、そして札幌圏はオール北海道に対してどういう役割を担うのかということは、我々以上にもっと進んだ事例があり、それを考えると、とても仙台はおっとりしてられない。仙台や宮城県が果たす役割は経済的にも行政的にもかなり大きいものがあって、本気でこれを位置づけて取り組んでいかないと、東北自体が相当疲弊してしまうということが非常にアップトゥデートな宿題として、目の前にぶら下がっていると思う。

- ・オランダが多極分散型都市の相互分散のモデルとされているが、なぜ日本でできないのかというと、市民社会の形成と行政のエンフォースメントや、マスタープランでそれをかなり明確に打ち出していつているところと非常に大きな違いがあるからだというのが一つある。それと、オランダの例を見ると流れているお金が非常に大きいのが、東北のように流れている量がそんなになく、どうしてもアメリカ型の集中型にならざるを得ないのかもしれない。しかし、記載する意味がないと思っているわけではなく、秋田や山形とこういうふうに役割分担をするということは言えるかもしれない。
- ・基本構想の推進のところで、今度は「行動する市民力」を生み出し育てていくという表現になっているが、既にあるものをバックアップし、更に拡大し、また広げていくというニュアンスの書き方がいいのかと思う。
- ・基本構想の推進は、箇条書きみたいな形で、政策形成過程に市民参加のあり方に対する議論を積極的に入れるとか、連携を広くやっていくためにそういうことを少し考えていくとか、何か推進のための工夫というところの書きぶりをもう少し積極的に書けるのではないか。
- ・施策の基本方向を見ると、組織というものは自明のことで、その市の組織が地域社会の形成や循環型都市のケアや都市構造の形成にかかわる形となっている。それは正しいが、やはり、組織自身もその在りようをきちんと見直して発展的に動いていきますというふうにならないと。3（施策の基本方向）というのは4（基本構想の推進）と個別の問題ではなく、非常に平行に、相互にフィードバックし合いながら、相互に発展していくという話ではないのだろうかと思う。

（別添図について）

- ・字がこんなに多いと多分ほとんど読まない。市民に対して発信するときには、もっと簡潔にしないと伝わらないのではないかな。

今回の図は起草委員間でのイメージ共有のため若干細かいつくりになっている。

- ・この内容について市民と共有するためには、あなたが主役だと言うためには、やはり自分たちは何をするのかということがもう少しこの中に盛り込まれていないと、本当の意味での共有にはなり得ないように思う。連携の仕組みももちろんそうだが、こういう図の中に、仙台市役所は何をしてくれるのか、私達と一緒に何をするんだろうというところでももう少し書き方はないものかと思う。
- ・やはり市民が何をすればよいのか、何をするによって市はどういうふうと一緒に歩いてくれるのか、自分達がリスクを取らされるだけなのではないかというような思いを緩和する力強い宣言がほしいと思う。

- ・少しシティープライドというか、具体的に仙台市が持っている歴史や文化や自然といったものについての若干のコメントはあったほうがいい。シティープライドを市民が感じられるようなまちをきちんとつくりますというのが非常に大事なことなのではないかと思う。
- ・図のことはとどまらないが、何か憲法でいうところの前文のようなもので、市民に、一つの市としてのメッセージというか、目指すべきものを具体的にわかりやすい文で伝えられるとよい。ターニングポイントが来ていることも含め、仙台の誇りというものもそこにうたい込んでいけるとよいと思う。もしかするとその部分がこういう絵の中にも入ってくるのかもしれない。

(資料2について)

- ・アジアの成長ということは事実そのとおりだと思うが、その後に、東北や仙台の成長という概念が成熟化ということとどういうニュアンスの違いで言っているのか、少しわかりにくいところがある。
- ・成熟を仙台で代位していくとするならば、発表の場や活躍の場を仙台として提供していくとか、情報と情報を結びつけて、いわゆるマッチングをきちんとする作業とか、場合によってそれを新しく進化させていく手法を仙台が持ち合わせているという、お互いにとってのウィン・ウィンの関係になっていくようなイメージではないか。
- ・我々は何を目指すのか。豊かさだとかあるいは自分の自己実現とか、いろんなテーマが出てくると思うが、それをどうやって、どういうキャッチフレーズのものに具体化していくかというテーマではないか。
- ・少なくともタイトルの言葉と一致させたほうがよいので、「東北全体の発展を応援し」というのであれば、東北全体の発展につなげる役割という、そのほうが多分理解はしやすいだろうと思う。
- ・の3番目の項目がタイトルの内容とちょっとそぐわない感じがする。は東北や世界とつながるというタイトルになっているのに、3番目は地下鉄東西線とか南北線の話で、これは仙台市内の話。むしろの中身に近いのではないか。
- ・地下鉄を中心として新しい投資が行われていて、そこで仙台全体の都市インフラをつくっていくということで、それは仙台の中だけの都市の問題というよりも、東北全体にとっても意味のあるような非常に重要なインフラを形成して、そのインフラをどうやって生かしていったらよいかという問題意識でこのの中に入れてあるという感じではある。
- ・こういう基軸による都市機能が非常に高度になっていくことや、それから例えばエンターテインメントとかビジネスとか行政機能、そういったものが非常にモビリティーが高まるとか、いろいろな意味で大きな都市機能の全体が東北に対する役割のアップにつながるというイメージは持っている。
- ・東西線は全部にかかわっている。CO₂の削減から健康、モビリティーの問題。それで結局ここにおさまっていったというのが正直なところで、おさまりがよいかどうかはわからないが結局ここに入っていくということなのだろう。
- ・資料1でかなり重要なキーワードになっている「行動する市民力」が、資料2では急に

何か見えなくなっているような感じがするので、資料1の勢いが資料2にもつながるように何か工夫が必要かと思う。

- ・(「行動する市民力」の記載が)1か所だから強調になっているのだろう。全体としてはとてもよく的確にわかると思う。
- ・「1つの大きなミュージアム」という言い方が、どのくらい伝わるかという点が心配。地域資源を活用してそれを編集し直す、磨いていくようなことによってミュージアムをつくるというようなニュアンスがどこかに加わっていったほうが良いように思う。

(2) その他

- ・特に議事はだされなかった。